

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：33912
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2011
 課題番号：20520533
 研究課題名（和文）社会・認知的視点から見た外国語としての英語ライティング力と動機付けの長期的発達
 研究課題名（英文）Changes in Japanese students' English writing ability and motivation to write in English: A longitudinal study from a sociocultural perspective
 研究代表者
 佐々木 みゆき (MIYUKI SASAKI)
 名古屋学院大学・外国語学部・教授
 研究者番号：60241147

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本人大学生の英語ライティング力が、様々な認知能力や社会文化的環境と相互に影響しながらどう変化していくかを追跡することを目的とした。調査の結果、以下の点がわかった。(1)被験者の英語力は有意に伸長したが、日英作文力は伸長しなかった。(2)留学期間は英語力伸長には有効だったが、英作文力を伸長しなかった。(3)参加者は大学入学後詳しく英作文の書き方を習ったため、その書き方や理想像は日本語作文に影響した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated how the English (L2) writing ability of 12 Japanese (L1) students majoring in British and American studies developed over their four-year university life. Over the observation period, the focus shifted from the effects of motivation on the participants' L2 writing development to relational developments among relevant cognitive, affective, and environmental variables. The study thus examined changes in the interrelationships linking L2 proficiency, L1 writing ability and motivation, and perceptions of L1/L2 writing as well as the participants' sociocultural experiences, including their study-abroad (SA) experiences. The results revealed that: (1) on average the participants' L2 writing ability did not significantly improve over the four years while their L1 writing ability significantly deteriorated; (2) the length of their SA experiences significantly correlated with improvements in their L2 proficiency but not in their L1 or L2 writing ability; (3) gains in their L2 writing ability significantly correlated with gains in their L2 proficiency; (4) the participants' L1 and L2 writing ability were significantly correlated throughout the four years; and (5) although the participants' perceptions of "good L2 writing" changed over the four years, their perceptions of L1 writing did not influence their L2 writing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：日本人英語学習者、第二言語ライティング力、長期的研究

1. 研究開始当初の背景:

(1)応用言語学の世界では従来、第2言語学習者を取り巻く環境とは切り離し、認知的能力(例:リーディング力、学習方略)のみに焦点をあてて研究がなされてきた。しかし、本研究者は、長期的発達を観察し教育への示唆を探るためには、近年推奨されている社会文化的視点を取り入れて、「学習者はなぜそのように変化するのか」に対して答えていくことが肝要であると考え、当初の計画案を作成した。

(2)さらに、研究の2年目(平成21年度)に、当初の計画案に加え、当時応用言語学の分野で新しく注目されつつあった Dynamic Systems Theory (ダイナミックシステム理論)の原理が、上記の社会文化的視点を包含する上位概念として有益であると考え、この時点で研究の理論的枠組みを大筋で組み直した。この際、参加者の第一言語ライティング力や「第一言語や第二言語で書く事についてどう思っているか」の概念の発達と、環境要因との相互関係の重要性に気づき、平成21年度から、それらの変数をリサーチデザインに加えた。

2. 研究の目的

本研究は、日本人大学生の英語ライティング力が、様々な認知能力や社会文化的環境と相互に影響しながらどう変化していくかを追跡することを目的とした。具体的には、日本人大学生の英語ライティング力が、「認知能力」(英語力や国語作文力)や、「情意要因」(動機づけや『日英語で書くことについて、どう思っているか』などの内観)や、個々の参加者が置かれた「環境要因」と相互に影響しながらどう変化していくかを、量的データと質的データの両面から追跡調査することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)日本の大学で英語を専攻する日本人大学生17名を研究参加者とした。このうち、1で記したように、本研究では、2年目から対象とする変数を増やしたため、全てのデータを採取できた参加者の数はこの17名のうち12名にとどまった。ただし、17名全員から、当初調査する予定だった変数のデータ(2の日本語作文と「内観」データ以外)は4年間分採取できており、データ処理も済んでいる。

(2)データ採取

(1)の12名からは、最終的に研究対象とした①~⑤までのデータを年一回、⑥を最終年度の卒業2ヶ月前に採取した。①から④までが量的データ、⑤と⑥が質的データである。

①英語力(Comprehensive English

Language Test, Harris & Palmer, 1986で測定、Listening 100点、Structure 100点の200点満点)

②英作文力(英作文の専門家が第2言語としての英作文標準測定基準を使って、その都度測定、200点満点)

③英作文を書く際の方略(英作文を書いた直後に、書き始めから書き終わりまでを録画したビデオを参加者に見せ、3秒以上書くのをやめた時に何を考えていたかについて聞く stimulated recall data)

④日本語作文力(国語作文の専門家が国語作文標準測定基準を使って、その都度測定、200点満点)

⑤日英作文の書き方や理想像についての内観、英語一般や英作文への動機づけ、それまでの英語学習の歴史や、英作文学習に影響を与えたと思われる出来事(社会文化的要因)についてのインタビューデータ(一人につき約1時間程度)

⑥「最終学年インタビュー」:4年間を振り返り、①~⑤の調査変数一つ一つの4年間の変化について、「なぜそのように変化したと思うか」についてのインタビューデータ(一人につき約2時間程度)

(3)データ処理と分析

量的データは量化して4年間の変化が概観できるように処理し、質的データも全て転記して、上記の⑥「最終学年インタビュー」の際に参加者に自分自身を振り返ってもらう資料としてもらった。この⑥のデータも全て転記を終え、4年間全体を概観する「第一次分析」を終えたところである。

4. 研究成果

現在、上記3-(3)で記したデータ処理を終え、参加者の4年間の全ての変数の変化と相互関係を概観する「第一次分析」を終えたところであり、その結果、以下のようなことがわかった。

(1)12名の被験者の英語力は、平均して有意に伸長し、英作文力は変化が無く、日本語作文力は有意に減少した(1年次と4年次の得点の t 検定による。図1参照)。

学年	英語力 (CELT200点満点)()は SD	英作文力 (200点満点)	日本語作文力 (200点満点)
1	100.0(18.7)	144.0(20.3)	137.6(43.9)
2	108.8(20.9)	154.6(19.5)	108.1(34.6)
3	131.2(22.6)	156.4(17.5)	100.3(29.0)
4	127.3(30.3)	149.7(23.8)	111.4(35.6)

図1:英語力、英作文力、日本語作文力の変化

(2)4年間の観察期間中の英語圏への留学期間

は、英語力の伸長とは有意に相関したが、日英作文力のどちらの変化とも相関しなかった（サンプル数が少ないため Spearman の相関係数を使用。以下も同じ）。

(3) 4年間の英語力の伸びは、英作文力の伸びとだけ有意に相関した。(r=.735, $p<.01$)

(4) 参加者の日英作文力は、各学年を通して、有意に相関があった(1年 r=.714, $p<.01$; 2年 r=.699, $p<.05$; 3年 r=.732, $p<.01$; 4年 r=.699, $p<.05$)。

(5) 参加者の多くは、大学入学後に初めて「まとまった英作文の書き方」を集中的に学習したため、「英作文の書き方」や「理想の英作文」に関する考え方は、4年間で大きく変容した。この考えは、彼らの日本語作文の書き方にも影響した。一方日本語作文に関しては、大学入学後も学習の機会が無かったため、考え方は変容せず、多くの参加者は、「理想の日本語作文があるのかもしれないが、それは英作文の理想の形と似ているかもしれない」、又は「わからない」とし、日本語作文の書き方については、大学4年の時点では、83%の参加者が、「一番良い書き方かどうかはわからないが、日本語の書き方を今まで習ってないので、大学で学習した英作文の書き方と同じように書いてしまう」と答えた。

(1)~(5)の結果は、以下の点を示唆していると思われる。

① 日本の英語教育における英作文力伸長は、英語力伸長に比べて学習者の動機づけが弱く、自律的学習者が育ちにくい。

② 日英の作文力は共に、学習しなければ、自然には学べない部分が多く、書く機会がなければ衰える可能性が高い。

③ 日本における日英両語の作文教育は、小学校から大学までの教育を通じての連携を強め、適切な場面に応じた効果的な書き方等の点で、学習者が日英作文の共通点や相違点を考えるような実践的な機会を提供することが効果的かもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Sasaki, M. (2012). The Modern Language Aptitude Test (Paper-and-Pencil Version). *Language Testing*, 29, 315-321.
- ② Sasaki, M. (2011). Effects of varying

lengths of study-abroad experiences on Japanese EFL students' L2 writing ability and motivation: A longitudinal study. *TESOL Quarterly*, 45, 81-105.

- ③ Sasaki, M. (2008). The 150-year history of English language assessment in Japanese education. *Language Testing*, 25, 63-83.

[学会発表] (計12件)

- ① Sasaki, M. (2011, June). (Invited Speaker) *Colloquium: Becoming a writing researcher*. Presented with Icy Lee, Hui-Tzu Min, Suresh Canagarajah, and Paul Kei Matsuda at the Symposium on Second Language Writing, Taipei, Taiwan.
- ② Sasaki, M., Baba, K., Nitta, R., Matsuda, P. K. (2011, June). *Effects of web-based communication tasks on L2 students' development of a sense of audience*. Symposium on Second Language Writing, Taipei, Taiwan.
- ③ Sasaki, M., & Shimokido, T. (2011, March). *Effects of varying lengths of study-abroad experiences on product and process in Japanese students learning to write in English*. American Association for Applied Linguistics Annual Conference, Chicago, IL.
- ④ 佐々木みゆき (2010年12月). (招待講演). 「第二言語ライティング力の発達: 認知と環境、Process と Product、Etic 的アプローチと Emic 的アプローチ」大学英語教育学会中部支部定例研究会.
- ⑤ Sasaki, M. (2010, May). What contributions can the study of Japanese EFL learners make to the field of L2 writing? Language Learning Round Table organized by Prof. Ilona Leki, University of Tennessee on Cross-Pollinations in L2 Writing Research across Continents, Symposium on Second Language Writing, University of Murcia, Spain.
- ⑥ Sasaki, M. (2010, May). Japanese students learning to write in English: A longitudinal analysis of the effects of study-abroad experiences. Symposium on Second Language Writing, University of Murcia, Spain.
- ⑦ Sasaki, M. (2010, March). *Effects of a six-week study-abroad program on L2*

writing: A case study of four Japanese learners of English, American Association for Applied Linguistics Annual Conference, Atlanta, GA.

- ⑧ 佐々木みゆき. (2009年8月). (招待シンポジウム). 「アウトプットとしての第二言語ライティング力と動機づけの縦断的研究」. 第35回全国英語教育学会鳥取研究大会.
- ⑨ 佐々木みゆき. (2009年9月). (招待シンポジウム). 「『第2言語ライティング力研究』の過去、現在、未来」. 日本語テスト学会 第13回全国研究大会.
- ⑩ Sasaki, M. (2009, May). (Plenary Speaker). *Changes in Japanese students' English writing ability, strategy-use, and motivation during their 3.5 year university life*. 26th Conference of English Teaching and Learning in the Republic of China. National Tsing Hua University, Taiwan.
- ⑪ Sasaki, M. (2009, March). (Invited Speaker). *L2 writing in EFL higher education*. Writing Interest Section's Academic Session, TESOL Annual Convention, Denver, CO.
- ⑫ Sasaki, M. (2008). *Japanese students learning to write in English for 3.5 years: Confirmatory and exploratory approaches*. Symposium on L2 Writing in Transnational Perspective: Learning-to-write and Writing-to-learn Dimensions, organized by R. M. Manchón and presented with A. Cumming, A. S. Canagarajah, R. M. Manchón, J. Roca, and L. Murphy, with L. Ortega as discussant. AILA 2008: World Congress of Applied Linguistics, University of Essen, Germany.

[図書] (計1件)

- ① Sasaki, M. (2009). Changes in EFL students' writing over 3.5 years: A socio-cognitive account. In R. M. Manchón (Ed.), *Learning, teaching, and researching writing in foreign language contexts* (pp. 49-76). Clevedon, England: Multilingual Matters.

[その他]

ホームページ等

<http://miyukisasaki.com/ja/index.html>

研究機関の業績一覧

<http://www.maruron-ac.net/ngu-u/public/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 みゆき (SASAKI MIYUKI)
名古屋学院大学・外国語学部・教授
研究者番号：60241147